

阿古女のうた

一九七三年七月五日第一刷発行

一九七三年七月三十一日第二刷発行

著者 江夏美好

発行者 稲垣喜代志

発行所 風媒社

名古屋市中区不二見町七ノ一 久野ビル
電話・名古屋 052 (331) 0008
振替・名古屋 5616

印刷 日大印刷

製本 中部製本

装幀 小池かよ

■落丁・乱丁のさいはお取換えします。

阿古女のうた

江夏美好



日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

目次

阿古女のうた

7

ゆかたの履歴

53

骨の中の石

85

めし売切れ

97

よいものおんめ

123

南天はなぜ枯れる

143

黒い夜

195

鳥獣人図

247

あとがき

311

阿古女のうた

阿古女のうた

頂天の地肌が鳶色をして、むっと日向臭いのが、おかっぱ髪の特徴である。ミチにはそれがなかった。

しつとりと濡れたような感觸の漆黒な髪。一本々々がこまかく密で、海草に似た匂がした。底に蒼さを刷いた白い顔、頬にくっきりうきでている毛細管の血の網。それに、大きく見ひらかれた眼は、白眼が青くひえていた。黒眼はいつも焦点がさだまらず、きわめてまばたきがすくない。肉づきに欠けたほそい鼻は、小鼻のふくらみが小さかった。さらに小さな唇は、つねにうすいとき色であった。

ミチの唇が赤く血の色をうかべるとき、日ごろのからだの状態に、異状をきたしたしるしであ

る。ミチの今夜の唇は赤い。まるで椿の花びらをむしりつつきて、この子の唇に貼りつけたようだ。

ミチのこうして唇の赤いときは、きまって眠りが浅い。ようやく眠ったからと、そうと身をずらせても、その気配で敏感に眼をあける。もしもそばにもとめる母の姿がなかった場合、べつに大声だして泣きだしもしない。いつのまにか習得した示威運動のように、しきりに指を噛む。爪で顔をかきむしる。

いつも爪はみじかく剪っておくことを怠らぬように気をつけた。それでもはずみで、うすい皮膚に爪傷をつける。わずか一ミリばかりの傷口からでも、血がとめどなく流れでる。そのつど、この子のからだのとぼしい血がうしなわれてゆくのである。

血友病——医者よ薬よと手をつくした揚句、医者から匙を投げられた。先天的な出血体質とて、かたちばかりの投薬をしてくれている。

八重はそれでも屈しなかった。八重の愛情をそそぐに不足のない母一人、子一人であったからだ。

乳呑児のころは、よく肥って可愛らしい子であった。よその赤児とくらべて、どこと違ってかわった点もなかった。ところが這い這いが標準よりずっとおくれた。不審に思つて医者に診せたときは、もう血友病の症状をあらわしていたのである。

先天的、したがって遺伝的と医者から宣告されて、八重は頭から否定した。八重の知るかぎり、八重の身うちにも、また夫の先祖にも同病患者らしき者を認めることができなかった。

ともかく、八重は自分の全力かけた愛情でこの子を救えぬはずがないと信じた。確信こめてミチを護り育ててきた。むなしい努力ではなかったと思う。ミチの生命のコースは、ふとくもほそくもならず、五年間をたどってきたのだ。そしてまた明日へとつづいてゆく――。

ミチの寝ているのが茶の間の六畳であった。ガラス障子をへだてて、奥が八畳の居間である。ミチが完全に寝つくのを待ってから、八重は静かに立ちあがった。腰をかがめてガラス越しに居間へ会釈した。

電燈を消していても、茶の間の豆電気で奥の居間の様子がわかる。居間にはこの家の主の老夫婦が寝ている。

八重の会釈に、老婆のやすが枕から頭をもたげ、「なかなか、大変だちゃあ」と声をくぐめていった。

「ほんとに世話がやける子でね」

「そいがそいが。達者な子でも、面倒いやがに、大変だちゃあ」

八重はけっしてミチの世話がやけることを苦痛と思わなかった。ミチが発病してから五年の歳月で馴らされたからであろう。それでも、やすとその夫の源三には、自分ほどみじめな女はいないと響くいいかたをする。同情されているほうが、同情されないで暮すより、住み心地がよいからだった。

二階への階段をのぼる。堅実な家の造りだけれども、古くてどことなくゆるんだらしい。足音を殺そうとしても、ひと足ごとに、ぎぎぎぎと音がする。

老人とは耳の遠いものと相場がきまっている。例外もある。階下の老夫婦は、かくべつ耳ざとい。二階で自分の仕事をしているあいだ、家全体が小刻みに揺れている感じであった。階下に寝ている老夫婦は、かすかな震動すら聞き逃しはすまい。いくら簞笥の引手の環の鳴るのを防ぐため、小布をまきつけても、家の震動までは防げなかった。階下に気がねしては、明日からたべてゆけぬ。生きてゆくための手段として他に方法がないにしろ、家を追いだされたら困ってしまう。こんな海ぞいの町でも、やはり住宅難であったから。

階段を登りつめる。障子に手をかけた瞬間、八重は母親の本能から、女の本能にと立ちもどっていた。

「おそいんだな」と、部屋の中から声がした。たしかな生活の上に、がっしり腰をおろして生きている男の声だった。

部屋にはいり、うしろ手に障子をしめながら、すみませんと八重はかるく頭をさげた。

「なにをしていたんだ？」

腹這っていた男は、指につまんだ煙草を灰皿にねじりすてた。

つつと、膝でそば近く進んだものの、八重は蒲団にはいるのをためらった。

「かれこれ、小一時間は経つだろう」

勝手な真似は許さぬと、とげのあるいいかただと八重は聞く。ええ、どうせ金で売ったからだ。よ。だからこそ用事がすんだあとは息ぬきもしたいのよ！とでも、づけづけいえたら気が楽だろうと思う。八重にはいえなかった。手荒く男の枕もとの煙草盆をひきよせ、うすみどりの箱の

“憩”を一本ぬいて唇にくわえた。

好きな煙草ではなかった。真似だけ吸うにも、ずいぶん苦勞した。女として一番どん底生活に堕ち、それに耐えるためには、はやくどん底生活をする女の型にはまりたいと考えた。またニコチンは病氣をうつさないとの迷信を信じていたからだ。病氣とは胸の病いのことである。

男は、八重の横坐りしてのぞいた足指をつかまえた。

「ほら、こんなにひえているじゃないか。いつまでも寒いな、梅雨といっても、まるで秋しぐれのようにだ」

男は花柄銘仙の掛蒲団を持ちあげた。けっして金で買った女に対する仕種ではない。さらにある夫婦の図である。さりげない男の態度に、八重はむくれていた自分がちよっと氣になった。

べたんと坐った畳が、ひんやりしめっぽい。梅雨になってから、毎日降りつづいている。腰の一枚に、スフモスの単衣を着たきりの裾から、畳のしめっぽさが這いのぼってくる。がまんがならず、八重は蒲団の中へすべりこもうとして、ふと躊躇した。こんな場合、他の女たちならどうするであろうか。カストリ小説で覚えた場面を思いうかべてみたが、どの例も自分には不自然な氣がした。それほど八重は、まだ完全に夜の女になりきってはいない。この男の温かな肌は、今夜をふくめて、幾度かの経験でよく承知しているというのに……。

不運な生まれの八重であった。

富山市の三等郵便局長を父に持った。順調なれば、まずは幸せな娘時代が送れたはずである。そ

れが乳呑児のうちに母と死別した。継母の手にかかったが、すぐに母ちがいの弟が生まれ、弟がかたことをいはいじめた可愛いさかりに、父が病死した。継母は第二の夫を迎え入れた。彼女は平凡で、悪意のない女であったけれども、八重は当然に邪魔者の位置におしやられた。八重には血のつながりのまるでない弟や妹が生まれた。

小学校を卒業するなり、福井市の呉服商にあずけられた。死んだ実父と、毛三すじほどの血縁が頼りであった。

子守りから女中奉公の過程をたどるうち、町内割当の慰問袋が縁となり、戦地にいる一人の兵隊とひんばんに手紙の往復がはじまった。もちろん、大陸の風を孕んでくる兵隊の手紙は、検閲すみの紋切型。八重の送るそれは、戦後の娘に課せられた役目である。大の兵隊最前であった主人の機嫌をとりむすぶことにも役立った。

男は運よく帰還した。『生めよ、殖やせよ、地にみてよ』との、文字どおりの斟酌からである。郷里へもどりながら、礼をのべに男は立ちよった。大陸灼けた風貌で、とくべつ八重の脳裡に印象づけられはしなかった。それにもかかわらず、ふたたび男がやってきたときは、八重の夫としての資格を持っていたのである。主人と男とのあいだに、ちゃんと手はずがととのえられていてのうえだ。戦争中の女は、人間としてはあつかわれず、勝手気ままは許されなかった。

「軍国の美談じゃて」と、主人は町内に自慢して歩いた。八重には四季の衣裳のひと通りと、家具一式を祝ってくれた。

自分の意志を加えず、他人まかせの結婚である。そのうえ夫の徳次は、新妻をいたわる言葉すら

知らない男であった。八重は無口な夫も苦にならなかった。

夫の生家は飛騨船津の在郷にあった。

徳次によく似て無口な兄と、小心者らしい兄嫁に、口八丁、手八丁の働き者の姑とが、わずかな田畑にしがみついて働いていた。茅葺屋根の母屋から離れた小さな物置小屋が、二人の新居に改造されてあてがわれた。夫は近くの鉱山に就職し、毎日腰弁で通勤した。

母屋からは一坪の土地もゆずってもらえなかった。食糧不足のおりから、八重は荒地を借りて開墾した。ようやく雑穀の種を蒔き、その収穫まえに、夫は再度の赤紙で狩りだされた。八重はミチを身ごもっていた。

瘦せた荒畑しか持たぬ一人住いでも、容赦なく供出用紙がまわってきた。というより、母家への供出を、姑が割当てたのである。八重は死にもぐるいで夫の留守をまもり、ミチを産んだ。

やがて、はじめであった戦争はおわった。夫も無事復員した。安堵の吐息もつかのまで、ミチの先天的な病気の発見。そしてさらに夫の発病である。戦地での酷使のたたりで、胸を患ったのであった。鉱山病院へ入院したが、病状は悪化するばかりで、「どうせ死ぬなら家に帰って畳の上で往生したい」と本人がいいだして家につれてもどった。半年ばかりのあいだに、夫はミイラのように瘦せかけて死んだ。吐けるだけの血を吐いたのちに――。

通夜の席で、姑は形見わけといって、わずかな農具から、夫の作業服までとりあげた。いっそ呆れて、腹も立たぬほど手早く処置したのである。兄嫁が同情してひねり紙にして渡してくれた銭別と、嫁入りのときのわずかな世帯道具を金に換え、八重は飛騨を去った。

もと働いていた福井の呉服屋を頼って行ったが、子持ち女の奉公人を使う余裕はなかった。数日ゆっくり滞在させてもらっただけである。主人が知人に紹介状を書いてくれた。石川県の山中温泉で旅館を経営しているから、住みこみ女中なら使ってくれようという。訪ねてみたがむだだった。ひと眼で病身とわかる子供づれでは、むりな奉公先であったのだ。

職をもとめて転々し、ようやく片山津温泉近くの現在の二階を借り受けられた。一人息子を戦地で、富山に嫁いでいた二人の娘を空襲でうしなったという老夫婦は、死んだ娘の再現のように八重に親切であった。老爺の源三は、富山の新湊で、底曳網漁船のもと船長であったという。老婆のやすは、つれづれに化粧雑貨の小店をひらいている。

「どうせ身より頼りもない者同士だがや、助けあって仲よう暮したらええがな」

という源三は七十二歳。屈強な骨組をしていて、海の男として生きていた面影をうしなっていた。半白な五分刈頭をし、くぼんだ眼と驚鼻をしていて、一文字にひきしまった口もとは、日本人の顔立ちではないようであった。ながい年月の海上生活でひえこんだためか、ひどい神経痛を患っていて、毎年入梅どきや秋雨のそぼ降るころは、歩行困難で便所にも立てず、老妻の世話になるということだった。

「ミチちゃんは、わたしたちの孫みたいなんや、いっそ孫になってくれんかいね」

という老婆のやすは六十五歳であった。

やすは源三とくらべて小柄な女で痩せていた。立居ふるまいに品があり、若いころの美貌を髣髴とさせる老女である。

「水を離れたら、陸にあがった河童とおなじだちゃ」と、口ぐせにいう源三は、いまはまったく収入の途がないらしい。店にある化粧品や雑貨ものの上は、いつもうっすらと埃がかかっていた。ときおり、線香やチリ紙を買いに客が訪れたが、たかの知れた商売で、船長時代の名残りの金目のかかった家具調度などを売り、ほそぼそとくいっないでいるようだった。

八重は福井の呉服屋できびしくしこまれた縫物に、自信があった。『お仕立物いたします』との小さな板看板を、やすが表戸にうちつけてくれ、仕事をさがしてきてくれた。

その日から八重は、毎日、針を動かしはじめた。戦後成金の温泉遊びがさかんになりはじめ、温泉旅館の女中たちの着る衣裳縫いの注文は、応じきれぬほどであった。けれども、たまさか注文のある高級呉服なら縫賃も高く、祝儀もはずんでもらえたが、旅館女中の働き着ていどの針仕事では、終日、肩をこらして励んでみたところで、どれほどの収益にもならなかった。眼が疲れてかすみ、手が疲れてこわばり、これではいけないと、他の職さがしもやってみた。

住みこみ女中が不可能であり、体力に自信がなくては、復旧工事や道路人足など、女土方の仲間にもなれない。

ミチ一人の栄養を保つには、梅干や沢庵のしっぽで一食をすます階下の老夫婦のようににはゆかなかった。八重は目ぼしい衣類を売りつくし、悶々の日を暮したはてに、ひそかに母子心中を企てた。ところがミチ不憫の情が、最後の決行の邪魔をした。

やす夫婦が再婚話を持ちこんできたのは、そんなおりである。相手は近在の百姓で、死別した先妻の遺した幼い子供が二人いるという。当の相手と、それとなく階下の居間で見合もさせられた。